

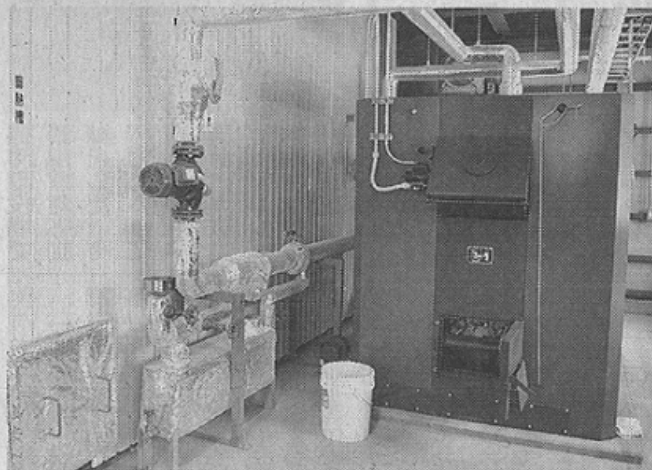
湯の沢温泉にボイラ

事業者らと林地残材有効活用

冠 村

【旭川】占冠村は、村内の林業事業者らと「占冠村木質バイオマス推進コンソーシアム」を結成し、村が運営する湯の沢

温泉にまきボイラー基を設置した。20日から供用開始し施設内の暖房や温泉の加熱に利用する。同村は、村内の林地残材の



湯の沢温泉に導入したまきボイラ。施設内の暖房や温泉の加熱に利用する

有効活用を進め、林産物を活性化する方針だ。

同村は、村有林が2000ヘクタールを占めるなど豊富な森林資源に恵まれているが、村内にあった8カ所の木工場が閉鎖・撤退し林産物は衰退している。そこで、湯の沢温泉の指定管理者であるスポーツピア、村内の林業事業者の長瀬産業や高橋重機、北海道新エネルギー普及促進協会とコンソーシアムを結成。林地残材の高付加価値化を図る木質バイオマス事業を新しい切り口に林産物の再生を目指す。

最初の取り組みとして道の一村一エネ事業を活用し、湯の沢温泉にまきボイラを導入した。事業費は3600万円。村内にチップやペレットの燃料製造設備がないことやボイラ管理者の雇用を創

出できることから、まきボイラを採用した。

富良野地区森林組合が主・間伐する村有林の残材を林業事業者に提供し、まき材に加工。湯の沢温泉に設置したボイラに供給し、施設内の暖房や温泉の加熱に利用する。

ボイラは、ドイツのフルティング社製で、熱出力は200キロワット。まきは年間163トンの消費を見込みだ。既存の重油ボイラと比べ、年間で二酸化炭素を160・7トンの削減できるとしている。

20日に現地で開いた火入れ式では、中村博占冠村長など村内の関係者、上川総合局や森林管理局の担当者が出席し、完成を祝った。